

碁浦番所物語

寛永十年（一六三三）徳島藩は高松藩との国境争いのなか、現在の鳴門市北灘町の碁浦（じゅう）の浜に、一方的に番所を置いた。

この時代、讃岐街道から阿波に入るには、讃岐山脈を抜ける大坂峠を歩かなければならないが、その大坂峠の入り口から、播磨灘の海岸線を東に半里ほど向かったところに、碁浦の浜があった。

そんなところに徳島藩が番所を置いたのは『昔から碁に使う黒石が採れる浜が境界になっていた』との言い分であったが、高松藩はそれを納得していなかった。

というのも、碁浦の浜には、見ようによれば大きめの碁石のような丸い石があったが、砂石がほとんどで、黒い石は稀にしかないことから、本当に碁に使う黒石を採ったのか疑わしいと考えたからだ。ゆえに徳島藩が番所といっても、この時点では、浜に建てられた見張り小屋といったところで、高松藩はこれ

を立ち退かせるために策を練った。

しかしこの時代、徳川幕府が『武家諸法度』で大名同士の私闘を固く禁じていたため、表だった争いは避けねばならなかった。その為、徳島藩の番所設置を妨害したのは、どこの誰ともわからぬ山賊であった。山賊は山から一気に攻撃を仕掛け、番所小屋にいる徳島藩士を追い払い、たちまちのうちに小屋を焼き払ったとのことであった。

これに対して徳島藩も、表だった争いはできないために、対抗手段に苦慮したが、藩の建てた番所小屋を襲撃したのが山賊であることから、これを討伐するための精鋭を派遣することになった。ただ、これも人数は限られた。大人数なら軍勢と見なされるため、ほんのわずかな手勢でなければならなかった。だが、この人選に藩は困り果てた。徳川幕府の時代となり、天下太平の世が始まっており、戦を経験した藩士はほとんどいなかった。

山賊に襲われても、これを果たして撃退できるのか、ことによれば、逆に斬り殺される。そんな命懸けの役目だったからだ。

ところが、これに志願をする者がいた。藩の中老格の滝田重三という男だった。この男、剣の腕が立ち、頭が切れると評判だったが、役付ではなく無役であったため、藩にすればこれ幸いの志願だった。

滝田は、剣の腕が立つ浪人二人を金で雇い、碁浦に向かった。藩の大方の連中は『たった三人では死に行くようなもの』と思ったのだが、加勢を志願する者はいなかった。

だが滝田は、そんなことなど意にも介せず、碁浦に向かう途中で屈強な漁師数十人を雇い、碁浦の浜に一日で掘っ立て小屋を建てさせ、そこに浪人二人と居座ったのだった。

一日目と二日目は何事も起きなかった。

三日目の夜、大きな声と共にホラ貝が吹かれた。当然、滝田は構えたが、その晩襲撃は

なかった。おそらく、前の番人はホラ貝の音に恐れをなして逃げ、そのすきに番所小屋に火を放たれたのだ。滝田はそう読んでいた。滝田は、小屋の前の焚き火をそのままにして、まだ暗い朝方に小屋を離れて、浪人二人と山の木の陰に潜んでいた。

やがて焚き火が消えて、陽が昇り明るくなった頃、またもホラ貝の音が響き渡り、岩陰から現れた七人ほどの賊が、小屋ににじり寄るように近づき、恐る恐る中を見て、

「徳島藩の腰抜け侍は逃げ帰ったようだ！」と歓声を上げて喜んだ。

滝田は油断している山賊の背後に素早く回り込み、

「逃げてはおらんぞ！ 山賊ども成敗してくれるわ！」

そう言うやいなや、一人の山賊を一刀両断で斬り殺した。

他の山賊は反撃するどころか、腰を抜かし

て座り込む者や、悲鳴を上げる者、震えながら剣を抜き構える者もいたが腰が引けていた。逃げようとする者もいたが、滝田が連れてきた浪人が行く手を塞いだため、逃げることもできなかった。

「命までとろうとは思わぬ。助けてしんぜるゆえ刀を置けえ！」

そう滝田に言われても、まだ抵抗を試みよう_とと構える者もいたが、滝田が刀を振り上げ、「死ぬか！」

と一喝すると、へたり込むようにして刀を置いたのだった。

かくして、山賊一人を斬り、のこり六人は捕らえて縛り上げた。いずれも山賊のなりはしているものの明らかに若い高松藩士だった。捕らえた六人は密かに撫養にある代官所に移した。

滝田が、山賊を生け捕りしたことは、徳島藩はもとより高松藩にもすぐに知れ渡り大

騒ぎになった。山賊ではなく藩士であることは高松藩も承知のことだったからだ。それどころか、

『山賊のなりをして徳島藩の番所小屋を脅して来い』と命じたのは、この問題を与える高松藩生駒氏の重臣であった。

だが、すぐに徳島藩が助け船を出した。『ことを穏便に済ませるために山賊六名を高松藩に引き渡したい』と。

ただし条件として、碁浦が阿波と讃岐の国境であることを高松藩が認めることを要求したのだった。

高松藩はこれを飲むしかなかった。もし飲まなければ若い藩士六人が山賊として処刑される。もつと最悪なのはこの藩士が『藩命で山賊になりすまし、徳島藩を襲撃した』など_とと白状すれば『武家諸法度』に背いたことになり、生駒家の改易も考えられるからだ。これ全て滝田重三の狙い通りであった。

滝田の手柄によって、徳島藩は国境の見張りとして正式に番所を置くことになった。そしてその一切の差配を滝田重三に任せることにした。万が一、また国境争いが再燃する事も考えられ、その為の人事でもあった。

滝田にとっては、無役から役付きになる大出世だったが、碁浦は何もない辺境の地である。こんなところに追いやられるのは不満であった。ところが、来てみると魚は旨いし、山を越えて東に行けば、この当時栄えていた撫養の港町に意外と近く、欲しい物資もすぐに手に入った。それに浜辺でのひとときはなんと心地よかった。

滝田はすぐに撫養で人夫を雇い、道を開かせ、さらに大工を雇って、番所小屋と、自分の仮住まいの家を氣にいったように建てさせた。なにしろ重要な藩命で来たのだから、藩から金を引き出すのも容易であった。たまに勘定方が出す金を渉るものなら、

「我らは高松藩から藩領を守るため辺境の碁浦に遣わされておる！」と一喝すれば

「そうであった！」と金を出すのであった。

そして寛永十三年（一六三六）碁浦に番所小屋が完成した。

本来番所とは、人の往来の取り締まりや荷物の検査を行うものだった。江戸時代、庶民の旅は自由ではなく、人の移動は厳しく制限されていた。もしも、これを自由にしていたなら領民が減ってしまいかねないし、人の移動と共に藩の特産物が持ち出されてしまうからだ。薩摩藩の薩摩芋などは種芋を持ち出されれば、国中に広がってしまうので、藩内から持ち出そうとする者があれば即刻切り捨てられた。

だが、これだけ厳しい取り締まりがあったにもかかわらず、お伊勢参りなど有名な寺社に参詣する旅行には寛大で、四国なら金比羅詣りと、四国八十八カ所詣りに全国から大勢

の旅人が来ていた。

そんな四国通路の間に、碁浦に番所ができ、撫養までの道が通じたことがしだいに知れ渡った。碁浦に向かう海岸筋の道は、岩場が多く大坂峠越えに比べて難所ではあったが、足が達者で持っている荷物が少ない者なら、瀬戸内の海を眺めながらの歩き旅は、これもまた粋なもので、淡路に渡る港も近いと伝えられたのだ。

そんなこともあって、番所だけだった浜には、木賃宿が建てられ、その木賃宿に魚を売る漁師小屋が建ち、さらには米や芋、野菜を提供する百姓の家も建って、たちまちのうちに小さな村になった。

滝田の働きで碁浦の番所が形を整え、世間に知れ渡るようになったため、高松藩は文句のつけようもなくなった。これは、さっさと既成事実をつくりあげた徳島藩の勝利であり、滝田の手柄でもあった。

碁浦に番所を設置してから二年後に、讃岐山脈を大坂峠越えで、阿波に抜ける大坂口（現在の板野郡板野町大坂字ハリ）に見張り番所ができた。

この番所ができてから大坂峠は讃岐と阿波、さらに阿波から全国に通じる交通の要所となった。その後、阿波の海、陸の交通の要所に、次々と同様の番所が設置されていった。

番所を作る最大の目的は、特産物である藍玉あいだまの製法技術の流出を食い止める事であった。

その当時の阿波は、藍染めに使う藍玉の生産が盛んで、全国の市場を独占していた。この藍玉の製法技術が、藩外に持ち出されることになったら一大事なので、藍玉など藍に関する流通は徳島の港に限定していた。一つの港ならば厳しく取り調べることができるからだ。

そのため、阿波から出る他の港や峠、さらに川まで、いたるところに番所を設置するこ

とになったのだ。

これらの番所役人には下級藩士があてられたのだが、番所役人の心得などない上に、次々と新米の番所役人ができるために、その指導役が必要となり、藩は碓浦番所で手柄を立てた滝田重三にこれを任せることにした。

以来滝田は碓浦番所を拠点に阿波の各地にある番所の見回りに出向くことになるのだが、事は簡単であった。要するに藩にとつて大事な藍玉の製法技術の流出を防ぐ。これをたたき込めばいいのだ。

滝田はまず、藍の苗や藍玉などを藩から持ち出すことを一切禁ずると触れる高札を藩の要所に立てさせた。藍に関するものを持ち出せるのは、流通を許可している港に限れていることも書き添えていた。

そしてその後、最も旅人の通行が多い大坂口番所に出向き、新米番所役人に代わって、滝田自らが旅人の荷物の検分を行った。その

際、それぞれの番所から何人かの新米番所役人も立ち会わせた。

次々と番所に入ってくる、旅人の荷物を検分する滝田が突然立ち上がったかと思いきや、いきなり大刀を引き抜き、一刀両断で旅人の体を縦に二つに切り裂いた。切り裂かれた旅人は悲鳴を上げる間もなく一瞬で息絶え、それを見ていた大坂口番所の役人や、他の番所から見学に来ていた新米役人は、息が止まるほど驚いたのは言うまでもない。

滝田は切り捨てた旅人の荷の中から、藍の苗をつまみ上げ、

「この者、これこのように藍を持ち出そうとした。このような不届き者、即刻切り捨てるべし！」

そう言い放ったのだ。この日滝田は、別の旅人の荷からからも藍玉を見つけ、これも有無を言わせず切り捨てた。そして滝田は新米役人にこう言った。

「各々の番所から我が藩の藍が持ち出されることがあつたら、そこに務める役人は切腹など生ぬるい……この滝田が出向いて……」

そこまで言つて血の滴る大刀を振つた。飛び散つた血が新米役人の頬にかかり、その役人は腰を抜かしてへたり込んだ。だがこれで、新米番所役人の気構えは一変し、その日のうちに青ざめた顔で自分の番所に戻つたという。

この事件の話は、瞬く間に藩内に広がり、さらに旅人にも広がり、日本中に知れ渡るこゝとになり、許可なく阿波から藍を持ち出そうとする者は余程の覚悟が必要になり、徳島藩の番所役人も製法技術の流出を防ぐために、皆命がけで務めることになった。

この一連の顛末も、藩主はもとより国家老やほかの重臣に高く評価され、滝田は城に呼び戻され、藩内の全ての番所を統括する、番所奉行に任命されたのであつた。

これはこれまでにない異例の抜擢で、滝田にとつては大出世だったが、滝田自身は嬉しどころか、逆に堅苦しい城勤めをさせられることになるため、内心迷惑な話だと思つていた。

そこで滝田は、

「番所奉行を仰せつかつたからには、藩の宝である藍を、身命を賭して守る所存なれど、恐れながら、番所から離れた城にいては目が届かず、藍の流出を防ぐことは甚だ難しいと考えます。この滝田、汗にまみれ泥にまみれて藩内の番所をくまなく歩きたいと考えます。どうか何卒、お城勤めはご容赦のほどを！」

と重臣達に訴えたところ、

「なんとあつぱれな心構え！」と褒められたのだつた。

滝田の思惑通りであつたが、誤算もあつた。重臣達は滝田の任務の重さを氣遣つて、碁浦

番所の役人に新たな藩士を充てることを提案してきたのだ。

碁浦での、のんびりしたひとときを守りたいがために、心にもない、『心意気』を示したのだが、自分のことを思つての重臣の提案を、即座に断られるはずもなく、その場の思い付きで、

「ありがたい話なれど、藩内に番所がこれほど増え、そのたびに藩士を置いては、藩の財政の重荷となること必定。これをいかにするか考へるのも番所奉行の役目と心得まする故、そのご提案、しばしお待ちくださるようお願い申し上げます」

苦し紛れに言ったことだが、これにも重臣達は感心して、

「そうであった！ 碁浦をどうするか考へるのはそなたの役目であった。あいわかつた。よい方策を考えてくれ、そなたの言うように、たびたびの番所の設置で勘定奉行が困つて

おる。頼むぞ！」

と言われたのだった。これまで何度も無理を言つて金を引きだした勘定奉行にもこの話は聞こえるはず、何が何でも重臣や勘定奉行が納得する方策を考えねばならない。滝田は逆に追い詰められた氣になった。

しかしともあれ、当面は碁浦に居つくことが可能になった。各番所を見回るなど、たまに出向けばいいこと。頻繁に行けば逆に緊張感がなくなる。思わぬ時に顔を出して目が飛び出るほど叱り飛ばせば、その方が効き目は大きい。滝田はそう考えていたので、このころ碁浦番所でくつろぐことが多かった。

たまに來る旅人の検分は、連れてきていた滝田家の家來に任せて、今日は朝から、東に四里ほどの村に住む孫兵衛と言う男を呼び寄せ碁を打っていた。

この孫兵衛、近在の漁師から魚を買い取り、それをこれまた漁師の妻たちを雇い干物に

させて、徳島の城下町で売りさばく、この辺りでは羽振りのいい商人だった。

もともと、この孫兵衛も漁師の倅であったが、子供の頃に海の波に揉まれて岩に打ち付けられ、左腕を怪我してから、ほとんど力が入らなくなったため、漁師になるのをやめて、力のいらない干物づくりに精を出し、それを商いにまでしたのであった。

特に、どこでどう調べたのか、ナマコの内臓を抜いて海水で煮て、日干しした煎海鼠なるものが長崎から中国に輸出されているのを知り、この付近の漁師に作らせたところ、これが長崎の商人に珍重され、大きな商いになっていった。

孫兵衛のおかげで、この付近の漁師は、魚が売れる上に、その女房たちまで仕事にありつけたため、孫兵衛は漁師たちの絶大な信頼を集めていた。

碁は、年に一度か二度、碁石の元になる黒

石を碁浦の浜から採り、大坂に送っていることから興味を持ち、その後、徳島の城下町で鍛えたらしく相当な棋力の持ち主だった。滝田も藩内では誰にも負けたことがないほどの棋力なのに、この孫兵衛には完膚なきほどやられたのだ。

徳島城から初めて碁浦に向かう時に、立ち寄った干物小屋で碁盤があるのを見つけた滝田が、

「ほう……誰か碁を打つ者がおるのか？」そう尋ねると、

「私でございます」と名乗ったのが孫兵衛で、「ならば一局どうじゃ」と、軽くあしらってやろうと思ったのだが、三手目でとんでもない相手だとわかり、構えなおしたものの、もはや手遅れで逆に軽くあしらわれてしまったのだ。以来、孫兵衛と滝田は碁打ち仲間でもあり、滝田にとって信頼の置ける地元の有力量者となった。

高松藩との国境争いの際に、碁浦の浜に掘っ立て小屋を建てたのも孫兵衛が雇った漁師だった。碁浦は、いつ山賊に襲われるかわからない状況であったため、地元の大工は恐れて集まらなかった。困った滝田が孫兵衛に相談すると、

「掘っ立て小屋でよければ、私が漁師に建てさせますが？」と引き受けてくれたのだった。そして、孫兵衛の号令で屈強な漁師が数十人集まり、あつという間に山から木を切り出して、これまたあつという間に浜に小屋を建てたのだ。もしこれを山賊が見ていたとしても、筋骨隆々の漁師集団に恐れおののいたであろうし、へっぴり腰の若い武士なら、なおさらだったに違いない。

以来、孫兵衛は滝田の指示で、番所や役人の家の築造を段取りし、さらに旅人のための木賃宿も建てた。

碁浦の番所が短期間で形を整えられたの

は、孫兵衛の働きがあつてのことだった。

滝田と孫兵衛は今や切っても切れぬ仲であり、滝田にとって孫兵衛は碁仇でもあり、何としても打ち負かしてやろうと、孫兵衛を呼んでは相手をさせているのだが、孫兵衛とて忙しい時もあり、

「またですか……滝田様……」

とため息をつきつつ相手をするのであった。あつさりと負けてやれば相手にしなくならないと思われがちだが、二人の棋力は相当なもので、手抜きなどすればすぐに分かつてしまうため、孫兵衛も手加減なしで打っていた。そして、今日も滝田が負けた。だが滝田は次第に手ごたえを感じていて、近いうちに勝てるはずだと自信を持ち始めていたので、負けた悔しさはなかった。

「三日後にまた打とう。よいな」

さすがに滝田も、遠慮して毎日来いとも言えず、控えめに三日後と言ったのだが、

「滝田様、明日はどうですか？　来てもよろしゅうございますか？」

「何？　明日だと……いや構わんが……商いは大丈夫か？」

「へー、心配ありません。このところ次男の弥次郎がだいぶしっかりしてきたので、少しずつ任せております」

「弥次郎？　跡取りの弥太郎はどうした？　任せられないのか？」

「実は困っております、まったく仕事をやる気がないのか、あっちこちふらついては漁師と喧嘩したりで、手を焼いております」

滝田は弥太郎を何度か見かけていたし、弥太郎も滝田のを見かけたら丁寧に頭を下げて挨拶していた。藍の苗を持っていた旅人を切り殺した滝田は、恐ろしい男と噂になっていた、たいていの者は滝田を見ると震え上がったものだが、弥太郎はかなり度胸が据わっているのか平然としていた。父親の孫兵衛

も同じなので、おそらく弥太郎も親に似ていて、いい跡継ぎになるであろうと滝田は思っていたのだ。

「実は滝田様、お願いがございます」

なるほど、それで明日来ると言ったのだな。滝田はそう思った。

「弥太郎をここに来させますので、少しばかり説教をお願いできませんか。私が言ってもどうにもなりません、滝田様の説教なら、これはもう素直に聞くはずでございます」

滝田は首を捻った。やはり自分の子供のこととなると情が入り、弥太郎のことが見えていないと思ったからだ。

「そうであろうか……お主に似て考えを曲げるようにも思えんが……」

「いえいえ、是非にもお願いします」

碁仇の孫兵衛の頼みとあらば断るわけにもいかない。

「わかった。厳しく言ってきかせてやろう」

孫兵衛が帰ったあと、滝田はたつぷりと昼寝を楽しんだ。横になって浜に打ち寄せる波の音を聞いていたら、すぐに眠くなり、そのまま半刻ほど眠るのが碁浦での楽しみだった。^{はんとき}

このところ碁浦番所は暇になっていた。大坂峠に大坂口番所ができたこともあるが、何よりこの番所には、藍を持っていた旅人をバツサリと切り捨てた、恐ろしい番所役人がいると知れ渡り、旅人が寄りつかなくなったのだ。実は滝田にとってはこれも想定していたことで、これでノンビリと海辺の生活を楽しめることになったのだ。

滝田の世話をするために、孫兵衛が手配した漁師夫婦が番所に詰めていた。この夫婦への手当や、その他の経費も全て孫兵衛が引きうけている。

というのも、滝田の計らいで孫兵衛の干物が徳島藩の藩士の家に売れるようになり、さ

らに、その旨さが評判になり蜂須賀家にも納めるようになったのだ。これで孫兵衛の商いはさらに大きくなり、この付近の漁師達もおおいに潤った。そして、漁師達は孫兵衛同様

に滝田にも信頼を寄せるようになっていた。昼寝から覚めた滝田を待っていたのは、漁師夫婦が作る浜焼きだった。なんのことはない、浜で焚き火をして平たい石を焼き、その上にエビやらハマグリやら、穴子やらタイを載せるのである。この旨いことと言ったら言いつくせるものではない。徳島の城下町にいては、こんな贅沢などかなうものではないが、ここなら漁師が、魚、貝にエビ、イカにタコなどなど、いくらでも持ってくるし、時には目の前の海に飛び込んで、タイやヒラメを銚いで突いてくるのだった。しかし滝田の好物は別にあつた。いつも最後に食べる鰯とネギの味噌汁だ。獲ったばかりの鰯を引き裂いて鍋にぶち込む、すぐに鰯は煮えるのでそのあ

とネギを入れて味噌で味をつける。鰯のだしが出て、これが絶品の旨さなのだ。

たっぷりと海の幸を楽しんだ後、滝田はまた横になった。そして明日の朝の孫兵衛と打つ碁の策を考えた。このところ勝ち負けは度外視して孫兵衛の棋風を研究していた。もう十分に分かったはずだが、孫兵衛も自分が研究されている事をうすうす感じ取っているはずだった。明日、勝負に出るか、もう少し待って見るか、迷っているうちに眠くなってきた。

*

三日後。

碁浦番所から西に一里ほどの讃岐街道筋に、柿の木が一本だけ植えられていて、たわわに黄色い実を吊していた。柿の実はほどよく熟して甘い香りがあたりを漂い、その香りに誘われてか、ヒヨドリが実を食べに飛びかっていた。

そんな柿の木の下には古いお地藏様がちょこんと立っていて、その周りにはススキが生い茂り、白い穂を風にたなびかせていた。お地藏様の顔は童女のような可愛らしきで、見ていると心が和んでしまう、そんな顔だった。

だが、このお地藏様に近づいてくる若い女は、和むどころか泣くのを必死で堪えて歯を食いしばっていた。その女は布に包まれたものを大事そうに抱きかかえて、お地藏様の前にきた。やがて肩を震わせながら、

「ごめんよーごめんよー、どうしようもないんだよー お地藏様どうかお願いしますー！」
そう叫んだやいなや、抱きかかえたものをお地藏様の前に置いて、逃げるように走り去った。

お地藏様の前に置かれたのはボロ布にくるまれた赤ん坊だった。自分の身に何が起きたのか知るよしもなく、スヤスヤと眠っていた。

た。

四半刻ほどたったころ、お地藏様に近づいてくる男と女の話し声。

「そんなこと言っちゃってお前さん、あたしには食べることに以外に楽しみはないんだから、仕方ないよ」

「ははは、全くお前って奴は、宿場に着くなり喰う喰うわ、昨日なんか草団子を三つも平らげてからに、よくもあれだけ喰えたものだ」

「だって、朝早くから歩いてるんだから、お腹すくの当たり前だよ。お前さん、団子は食べないけど、すぐにお酒を頼むじゃないか、おあいこ様よ」

「はは、そうだった。俺は酒でお前は団子だった……いけねえ、酒の話するから喉がなっちまった」

「もう！ この飲み助！」

この夫婦連れ、大坂は堺から来た海産物問

屋「吉屋」の主喜三郎とその妻千代であった。夫婦で金比羅参りに行った帰り、讃岐街道から阿波に入り、撫養に向かっていた。

碁浦の番所に恐ろしい役人がいることは噂で聞いていたが、大坂峠を抜ける道よりも撫養へはかなり近いので、この道筋を選んだ。念のために持っている荷物の中に、間違って藍の苗や種が紛れ込んでいないか確かめたが、無論そんなものあるはずもない。

喜三郎、女房の千代に『飲み助』とからかわれたのに返事もせず、目が何かに釘付けになっていた。

「どうしたの？ お前さん？」

目線の先にはお地藏様。その足下に何か分からぬ布にくるまれたもの。

喜三郎はお地藏様のところに駆けだしてのぞき込んだ。

「千代、千代！」

驚いて口をあけたまま指さす先に赤ん坊

が眠っていた。

千代も赤ん坊に驚きながらそっと近づき、のぞき込むと、すやすやと眠っている赤ん坊が小さなあくびをした。それを見た二人は一気に緊張の糸がほぐれ笑顔になった。

そっと赤ん坊を抱き上げる千代。赤ん坊の顔を見つめながら、

「この子、捨てられたんだよ……可哀想に……こんなに可愛いのに」

「こんなに元気だったことは、捨てられてから時間はたってねえはずだ。ひよっとしたら、その辺にこの子の母親、いるかもしれねえな……」

そう言われて、千代は赤ん坊をギュッと抱きしめ、辺りを見渡した。だが人の気配はなかった。

「この子、どうする？」

「どうするったって、このままにしておけないでしょ」

「そうだな……もうすぐ番所に着く、そこで相談してみよう」

赤ん坊を抱きしめ、歩き始める千代。時折赤ん坊の顔をのぞき込んで笑顔になっている。その千代の顔を心配そうに見つめる喜三郎は、千代が転ばないようにと、そっと肩に手を当てている。

「ねえ……この子……見て、ほら、目元がお春にそっくりだよ」

喜三郎の顔が曇った。やはり思い出してしまったか。そう思ったのだ。

「何言ってるんだ。もう十年も前に死んだ子に重ねるんじゃねえよ」

「そんなこと言ったって、似てるんだからしようがないよ」

「もうやめろ……情が移っちゃいけねえよ」

「ねえ……この子、いつそのこと私らが育てよう」

「馬鹿言っちゃいけねえ。猫や犬の子じゃね

えんだ。捨て子とは言え人様の子だ。そう簡単にはいかねえよ」

不満そうな顔の千代。そんなことは分かっているといった顔つきだったが、赤ん坊の顔のぞき込んで微笑んでいた。

＊

赤ん坊を拾った二人連れが行ってから、また四半刻ほどたったお地蔵様の前に女が泣きながら走ってきた。

「ああー私の赤ん坊、いない、いない、どこ、どこ！」

先ほど赤ん坊を捨てていった母親だった。子を捨てたことを後悔して戻ってはきたが、もう赤ん坊は消えていた。泣きながら周りのススキの中を探し回るも、赤ん坊がいるはずもなく、お地蔵様の前で泣き崩れた。

＊

赤ん坊を拾った夫婦連れが、やがて訪れる碁浦番所では、滝田重三が土間に座らせてい

る弥太郎に説教をしていた。

「この親不孝もんが、仕事もしねえでケンカばかりしやがって……」

「ですが滝田様、漁師の若いのが、百姓の娘にちよっかい出してゐるのを助けてやっただけなんですって」

弥太郎は滝田を恐がりもせず、弁解していた。

「仕事もせずにフラフラしてるから、そんな面倒なことに巻き込まれるんだ。跡継ぎなんだから真面目にやれ！」

「はあ……跡継ぎなんですが、あつしに干物づくりなんて、どうにもかったるくて……」

「何？ かったるいだと。だったら……他の仕事を探しやがれ！」

そう怒鳴ってから、滝田は肩から力を抜いた。やはり弥太郎には俺の脅しなんぞ効かない。はなっからこれが脅しだってことを分かっている。藍を持ち出そうとした旅人を斬つ

たからといって、むやみやたらに人を斬り殺す事などないと分かっているのだ。

この日、滝田は朝から忙しかった。というのも連れてきているたった一人の滝田の家族が今朝方、熱を出して倒れたものだから、雑務を代りにやらねばならなくなったのだ。その上にいつになく、今日はこの番所を通過する旅人多かった。まさか素通りさせるわけにもいかないのので一人一人、形ばかりの検分はしたが、それでも時間はかかった。

『やはり、あと一人か二人連れてくるべきだった』そう思ってもあとの祭りであった。

「まあいい……今日の所は大目に見てやるが、今度ケンカおっぱじめたら百叩きどころじゃすまねえぞ。体の骨が全部へし折れるまでシバキ倒してやるからな……」

ウンザリした顔で脅しあげても、弥太郎には効き目はなかった。

「滝田様ゝそんなおつかねえこと、勘弁して

くだせえ」

弥太郎がわざと半泣きの顔を作っていることは、滝田もお見通しだった。

「……もういい、帰んな……」

弥太郎が立ち上がって帰ろうとした時、番所の戸が叩かれ赤ん坊を抱いた夫婦連れが入ってきた。赤ん坊は泣いているが抱いている女は、どうしようもないのか、ただただ下に軽く揺さぶっているだけだった。

滝田は、その様をジッと見つめてから、
「赤ん坊を拾ったってことかい？」

そう言われて驚いた様子の夫婦づれが、顔を見合わせ頷く。

滝田は、帰ろうと、そーっと入り口に向かう弥太郎に、

「おい弥太郎、ちょっと待ちな」

滝田に呼び止められ、背中をびくんとさせた弥太郎が情けない顔で「なんでしよう……」と振り向いた。

「漁師の源吉の女房が赤ん坊を生んだばかりだ。この子に乳を飲ませるように頼んできてくれ」

弥太郎、ああ、そういうことかと頷き、

「わかりやした」と、すぐに飛び出そうとする背に滝田が矢継ぎ早に声をかけた。

「あっそれから、この赤ん坊の母親を捜してきてくれ」

「えっ？ 赤ん坊の母親って？ そんな無茶な……」

いくらなんでも、捨て子の母親を捜せって言ったって、なんの手がかりもないのに、いったいどこをどう捜せば見つかるというのか、弥太郎は、開き直った顔で滝田と向き合った。

滝田は、弥太郎の態度に怒り出すかと思いきや、そりゃそうだという顔つきになり、
「この子が捨てられた所に行けば、子供を捨てたことを後悔して、今頃戻って捜してるか

もしれねえ」

そう言ってから赤ん坊を拾ってきた夫婦連れを見つめた。

「どこで赤ん坊を拾った？」

夫であろう男がやっと口を開いた。

「街道を一里ほど向こうのお地藏様の前にこの子が……」

「一里ほど向こうの地藏の前だと……」

滝田が知らないところだった。

「ああ、それなら柿の木地藏のことです」

弥太郎は知っていた。

「へー、確かに柿の木が一本ありました」

この辺に昔から住んでいる者なら、みんな知っている柿の木地藏は、その昔、不作続きで餓死する者まで出るなか、柿の実だけが豊作で、なんとか食いつないでいたにもかかわらず、あろうことか役人が『年貢として柿を納めよ』と命じたため、これをやめさせるために直訴した若者がいたのだが、直訴は認め

られたものの、若者は磔の刑に処せられた。

柿の木地蔵はその若者の供養のために建てられたと伝えられている。建てられた当時のお地蔵様の顔つきは、若くして命を奪われたことを恨む、厳しさに満ちたものだったが、長い年月を経て柔和な顔立ちに変わったと言われ、それがまた評判になり、柿の木地蔵はこの付近の者に知れ渡っていたのだ。

「その柿の木地蔵には、よく赤ん坊が捨てられるんです。そのお地蔵様に預ければ、どんなに辛いことがあっても、いずれは幸せになれるって謂われあるそうです」

弥太郎の説明を滝田と吉屋の主が『ほう』といった感じで聞きいつていた。

「そうか、柿の木地蔵か、弥太郎、行って来い！」

「へい、わかりやした」

弥太郎は身軽に飛び出していった。

「さて……お前たちはどこから来た？」

番所では旅人の身元を確認するのが大きな仕事だ。

夫婦連れは通行手形を懐から出して滝田に差し出した。通行手形には金比羅詣りが目的と記されていた。だがこれは、金比羅詣りと言えば庶民の旅として大概認められていたためで、本来の目的は書かないことがほとんどだった。すでに金比羅詣りはすんでいて堺に帰る途中だった。

「堺の魚問屋の吉屋か、大坂へは船で帰れるはず……、撫養から淡路に渡るのはどうしてじゃ？」

「へい、できれば、こちらの灰干しわかめを買い付けたいと思ったしだいです」

「何？ 灰干しわかめとな？」

「日持ちがいいので商いには向いておりまして……」

「うむ。確かに灰干しなら長く持つ。して、仕入れ先のあては？」

「いえ、何分初めて来たもので、あてなどありません。こちらの港を回って探そうと思っております」

「それならば、こちらで差配してやるが、どうじゃ？」

「それは、ありがたいお話でございます。ぜひにも」

番所の仕事とは違うが、灰干しわかめを大坂、堺の商人が扱ってくれば、藩にとってもありがたい話であった。

「それから……お役人様……この赤ん坊でございですが、これも何かの縁、よろしければ私どもで引き取って育てたいのですが……」

そう言うてから、喜三郎は赤ん坊を抱いている千代の方に視線を向けた。赤ん坊を見つめている千代の眼は、母親のような優しさに満ちていた。

「実は私ども、十年前にたった一人いた子供

を死なせてしまいました……」

*

柿の木地蔵の前でへたり込んでいる若い女を、何人もの旅人が訝しそうに見ながら通り過ぎていた。

ちょうど遠くから赤ん坊の泣き声が聞こえた。その泣き声に女が素早く反応して立ち上がり、泣き声に向かって駆け出した。百姓らしい若い夫婦連れが藁で編んだ籠に赤ん坊を入れていて、その赤ん坊が泣いているのだった。ところが、見知らぬ女が目を見開いて「私の赤ん坊、私の赤ん坊！」と叫びながら走ってくるので、夫婦連れは驚いて、赤ん坊の籠をしっかりと抱きかかえた。

*

番所にもらい乳のための女がやってきた。女は滝田に頭を下げてから、赤ん坊のところに駆け寄り、千代から受け取るとすぐに乳をふくませた。

ぐずっていた赤ん坊は泣きやみ、勢いよく乳を吸った。千代はその赤ん坊を幸せそうな笑顔で見つめている。

「ご覧のとおり、千代は死なせた子供に似てるなどと言ひ出しまして……」

滝田は腕を組んで考え込んだ。この赤ん坊にとっては、吉屋夫婦に引き取られた方がよほどいいに違いない。この吉屋という商人、見た目だけで手堅い商いをしていることがわかる。その上に、まだ諸国に知られていない灰干しわかめに目をつけるところもいい。だが捨て子とはいえ人の子である。そう簡単に『連れて行つてよし』と言うわけにもいかない。

「子供がいらないから、いつそのことこの赤ん坊を引き取りたいか……うーん……そいつはどうだろうな……」

すがるような目つきで喜三郎に見つられた滝田は、

「そうさせて、やりたいんだが……」

『捨て子は村全体で育てる』それがこの時代の考えでありしきたりだった。子供は将来の大事な働き手になるからだ。その大事な子供を、村で育てずに藩外に連れ出すことを許してよいものか。滝田はそれを考えていた。

「お役人様、どうか……」

そう言うと、喜三郎は千代の方に視線を向けた。千代の赤ん坊を見つめる目はもはや母親のようであり、喜びに満ちていた。

千代を見た滝田は「ううーん……」と腕を組んだ。

喜三郎が続けた。

「死んだ子が今生きていたら十四歳になります。女の子でした。四歳の時に麻疹にかかって、手を尽くすも甲斐なく死なせてしまいました。今になっても、その時の無念がこみ上げてきます。その後、子供を授かることもなく、もうあきらめて養子でもと考えていた

とところでございます。ですが、思いもかけず、このようなどころで赤ん坊を授かりました。これはあのお地藏様が、私どもにお授けになったに違いございません。お願えます。

なにとぞ！」

ここぞとばかりに喜三郎が、頭を土間にこすりつけるように下げた。

滝田は喜三郎の言うとおりかもしれないと思ったが、

「まあ少し待て。母親が見つかるかもしれない」

喜三郎は『へえ……』と返事をして肩を落とした。

千代は、喜三郎と滝田のやりとりが全く耳に入っていないようで、とろけるような顔で赤ん坊を見つめていた。

「今夜は向かいにある宿で休め。朝までに灰干しわかめを作っている部落の長に、話が通るように一筆書いておくゆえ」

喜三郎は深々と頭を下げ小さな声で「あり

がとうございます」と呟いた。喜三郎の頭の中は、灰干しわかめの買い付けよりも、千代のために赤ん坊を引き取りたい、それだけだった。

番所の戸が勢いよく開き弥太郎が飛び込んできた。

「滝田様、見つかりました。言われたとおり、もう半狂乱で赤ん坊を捜してやした」

そう言う戸口から頭だけ外に出して、

「おい、こっちだ」と手を振った。

すぐに駆け込んだきた若い女は、赤ん坊を見つめるやいなや、乳を飲ませている女から奪い返して、声を上げて泣き出した。もう絶対に手放さないと叫び出した。感ぜしつかりと赤ん坊を抱きしめている。

その姿を千代は放心した顔で見つめ、やがて膝から落ちてへたり込んだ。

「滝田様、道々聞き出したんですが、女は山向こうの羅漢から来たそうで名は菊だそう

です。赤ん坊が生まれて、すぐに亭主が馬に蹴られて死んだそうで、それで喰うにも困って自分だけ死のうと……」

弥太郎は菊を哀れむように見ながら話した。

泣き止んだ菊は、赤ん坊に自分の乳をふくませ幸せそうな顔になっていた。

「菊にも死んだ亭主にも、他に頼る親戚もないようで困り果てて赤子を捨てたと言っておりました。」

「羅漢から山をさまよい歩いて来たのか……赤子を抱いて……」

羅漢は讃岐街道から大坂峠を越えて阿波に入り、五里ほどのところだった。

番所は通らずに山の中を歩いたのだろう。滝田は弥太郎と同じように菊を哀れんだ。

だが、滝田は表情を引き締め、菊を厳しい目で睨んで、

「菊！」

怖そうな声でいきなり名を呼ばれた菊は、何事かと目をきよろきよろさせて滝田を見た。

「いくら亭主に死なれたとはいえ、赤子を捨てるなどもつてのほか！」

菊はどう答えていいのかわからず、うろたえるだけだった。

滝田は、菊の幼さに怒る気が失せ、ため息をついた。

「まあ、この度はすぐに戻ったゆえ大目にみてやるとしよう……して歳は？」

動揺が治らない菊は、何を聞かれているのかも分からなかった。弥太郎がすぐに菊に近づいて耳元で「菊、歳はいくつだ？」と聞いてやった。

菊が滝田の方に顔を向け、恐る恐る答えた。「……十四でござえやす」

真正面から見る菊はまだ少女の面影を残している。『母親になるには早すぎる』滝田は

そう思った。

「腹、減ってるか？」

滝田にそう聞かれた菊の腹がグーッと泣いた。それを聞いた弥太郎がニコツと笑ってから

「滝田様、宿に行つて何か貰つてきやす」

「おう」

滝田の返事よりも早く弥太郎はもう戸口から出ていた。

赤ん坊の母親が現れてガツクリとへたり込んでゐる千代を、喜三郎が肩を抱いて立たせた。

「お役人様、母親が現れたんなら、もう私らの出る幕じゃありません……赤ん坊のことはもう諦めることにいたしやす」

「そうか……そうじゃな。しかたあるまい。では明日の朝番所に立ち寄るように」

「へえ、灰干しわかめの件、お願いします」

喜三郎が番所から千代を連れ出そうとす

るも、まだ赤ん坊に未練がある千代はなかなか外に出ようとしなかった。

そうこうしている時に弥太郎が番所に戻つて来た。盆の上にお椀と箸を載せていた。「芋がゆを貰つてきました」

滝田がうんうんと頷いたので、弥太郎が菊に「食べな」と盆を近づけた。芋がゆの甘い香りに菊が目を見開いていた。

「食べる間、俺が赤ん坊を抱いててやるよ」
弥太郎が菊から赤ん坊を受け取ろうとした時、千代が駆け寄つてきた。

「私が……」

驚いた弥太郎が、目でどうしたものかと滝田に尋ねると滝田は頷いた。

一歩下がった弥太郎の代りに、千代が赤ん坊を抱き上げた。

菊はすぐさま、お盆から箸と芋粥の入ったお椀をとつて貪るように食べはじめた。その食べっぷりに滝田と弥太郎は顔をほころば

せた。

その晩、滝田は菊と赤ん坊を番所に泊まらせてやることにした。もっともそれは、菊が雑炊を食べた後、赤ん坊を抱いたまま眠ってしまったからだ。よほど疲れていたのか死んだように眠ってしまい。起こすどころではなかった。

「滝田様、このままここで寝かせてやるわけには……」

菊と赤ん坊を微笑んで見ながら弥太郎がそう言うので、

「ああ、上にあげてやりな」と滝田が応えたのだ。弥太郎が座敷に運び上げて布団を被せ、赤ん坊は千代が菊の横に寝かせた。赤ん坊も乳をいっぱい飲んだとみえてすぐに眠った。

千代と喜三郎は目に涙をにじませ、可愛らしい親子の寝姿を見つめていた。

滝田はその姿を見て、何か思いついたように軽く手を打った。

やがて、喜三郎が滝田に深々と頭を下げてから、まだ菊と赤ん坊を見つめている千代を促して、番所の戸口に向かおうとした時に、「待ちな……」と滝田が二人を止めた。はて？　と言った顔で振り向く喜三郎に、

「いい考えがある。聞いてみるかい？」

怪訝そうな顔で喜三郎が頷く。千代は相変わらず赤ん坊を見つめていて、話は耳に入っていないようだ。

「見たところ、おめえさんら夫婦が赤ん坊を抱いていたら、子供じゃなくて孫だ。そう若くはないおめえさんらが、この子を育て上げるのは難しいかもしれない……」

喜三郎は、何が言いたいのかと言った顔で次の言葉を待っている。

「どうだい？　母親ごと引き取るってことはできないもんかね？」

喜三郎は驚いた顔になったものの、すぐに大きく頷いた。

「この菊という娘、十年前に死んだお前さん達の子供と同一年だ。ちょうどいい。こぶつきの娘を養子にもらうってことだ」

『なるほど』といった感じで喜三郎が何度も何度も頷くので、千代が何事かと喜三郎を見つめている。気づいた喜三郎が千代に微笑みかけるが、千代はまだ何があったのか分かっていなかった。

滝田の粹な計らいに弥太郎も笑みを浮かべ喜んでいた。そして、今度は弥太郎が番所の出口にそっと近づき、

「滝田様、あつしはこれで……」

「待ちな！」

抜け出すにはいい頃合いだと思ったのに、いきなり滝田が強面の顔に変わったので、弥太郎は驚いた。

「弥太郎、大目に見てやるのはやめた。お前はたった今から俺の手下として働きな。いやとは言わせねえぞ……」

*

翌日、菊と赤ん坊は吉屋夫婦に連れられて撫養に向かった。

滝田は、吉屋夫婦の通行手形に、『生き別れになった娘を捜し出す』という用件を付け加え、その娘が菊ということになり、当然赤ん坊は吉屋の孫ということになった。

菊にも通行手形を出してやり、『子供の頃に生き別れになった親元に帰る』ということにした。

灰干しわかめ作っている部落の長には、

『吉屋はこの後徳島藩と重要な関わりを持つ商人なるゆえに、部落あげて上質な灰干しわかめを納めるよう命ずる』

との書面を喜三郎に持たせた。これで吉屋がぞんざいな扱いを受けることはない。

弥太郎を手下として働かせるのは、弥太郎の度胸はもとより、一を聞いて十を知る賢さに惚れ込んだからだ。やはり親の孫兵衛の血

を受け継いでいるのだ。しかも頭がいいだけではない、菊や赤ん坊、そして吉屋夫婦を見る目に情がある。これは人の気持ちがよく分かっているってことだ。

弥太郎の才覚は他の番所役人よりも上で、こう言っては孫兵衛に悪いが『干物屋にさせるのはもったいない』と滝田は思った。

孫兵衛の干物の商いは、弟の弥次郎に継がせればいい。孫兵衛が納得してくれるように、弥太郎のこれから先の身分が、確かなものになるよう考えるつもりだ。

それはそうと、二日前の孫兵衛との囲碁の阿波の関所勝負は、またしても滝田の完敗だった。今までの対局とは違って、戦法を大きく変えて勝負に出たものの、それを孫兵衛はお見通しだったようで、難なく返り討ちにあってしまった。

それにしても孫兵衛、息子の説教を頼みながら、囲碁では手加減なし、剣の勝負に例え

れば一刀両断のごとくこのわしを切り捨てるとは、全くもって厚かましき奴。次は無理でも、次の次の勝負、なんとしても打ち負かしてやる。そう考えると、滝田は楽しくなっていて一人でニヤニヤしていた。

了

参考文献

- 桑井 薫著 阿波淡路両国番所跡探訪記
滝田よしこ編著 碁浦御番所 八田家文書
山田竹系著 阿波の関所
徳島県史
阿波の交通